あいコープ放射能自主測定ニュース

No. 88　2013年８月４回

生産者の取り組み
ー放射能対策をしていますー

相馬はらがま朝市クラブ

新たな名産を作り出し、雇用、産業の創出を目指して

相馬を離れることができなかった

震災直後、日々明らかになっていく放射能汚染の現状に、ここで何ができるのだろうか、と無気力な日々を過ごしていました。「これでは自分が壊れてしまう」そんなとき、古くから付き合いのある新潟の仲間に「新潟にきて再興しろ！」と誘われ、震災の翌月単身視察に行きました。これが自身を奮い立たせ、『はらがま朝市』設立につながりました。

この相馬を離れるのは簡単かも知れません。しかし先祖が守って来た文化、土地から離れてしまえば、今後子孫の繁栄が無くなるでしょう。私自身も含め、故郷の無い子孫にしてしまうのは忍び無い、この思いが相馬に残る一番の理由なのかも知れません。相馬には大切な友人、親戚がいて、美しい山、川、そして海がある。そんな相馬は今、放射能で汚され、苦しんでいます。それを元に戻すのが私達、相馬人の努めかとも思います。元に戻れるかわからなくても、やれる事はやって行こう、そう決意しました。

相馬はらがま朝市クラブ代表
髙橋　永真さん

全国絆　相馬復光松前漬

検査体制

商品の検査を月１回、工場内水道水、施設内の土壌検査を半年に１回実施し、製造過程でも汚染のないことを確認しています。

東北大検査結果（製品）

商品名	原料産地	放射性Cs合計
全国絆 相馬復光松前漬	北海道産（するめいか、昆布） 漁獲時期・2012年6～9月頃	＜25
真イカもろみ醤油漬	青森近海（真イカ） 漁獲時期・2012年7～11月頃	＜25

※単位 Bq/kg 上段 2013 年 7 月 10 日、下段 7 月 17 日測定。

まちの現状と未来

相馬市の生産高は水産業が約半分を占めます。震災前、相馬の水産業は近海で獲れる高級鮮魚が中心でしたが、原発事故による放射能汚染で自慢の鮮魚は、出荷不可能となりました。国や東電の補償は、最も従事者の多い 1 次産業には手厚い補償を行いますが、2 次産業以上への支援は少ないのが現状です。流通を担う２次産業以上が残れない状況では漁業が再開しても、相馬の水産業は成り立たないでしょう。そこで私たちは鮮魚に代わる、魚の『加工業』を相馬の新しい水産業にしようと、安全な県外の原料を加工、新たな名産を開発して雇用、産業の創出を目指しています。 今後、野菜や畜産品と組み合わせた加工品の開発、大学や放射能研究機関等の学術施設やテーマパークの誘致など考えています。支援者のネットワークを活用し、相馬に新しい産業を創り、若者も住める街にしようと活動を続けていきます。